

Title	出雲國風土記考證(後藤藏四郎著, 大岡山書店發行)(1)
Sub Title	
Author	和田, 軍一(Wada, Gunichi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1927
Jtitle	史学 Vol.6, No.1 (1927. 3) ,p.139- 140
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19270300-0139

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書

評

出雲國風土記考證

(後藤藏四郎著)
大岡山書店發行

歴史の研究に地理の必要なる事は敢て贅言を要せぬところである。史書が史的研究の經ならば地理書はその緯をなすのである。

われ／＼が日本書紀以下の國史を見て痛歎することの一つは、それらの史書に地理志のないことである。漢書以下支那の正史、或は朝鮮で云へば、三國史記のごとき、夫々地理志に大なる努力を致してゐるのである。そしてその地理志の存するを以て、本紀の闕を補ひ得るのである。殊に三國史記のごとき本紀の記載、僅少なるものに於ては、その地理志の研究を行ふのでなければ、史實を闡明することの不可能なものが甚だ多い。地理志があつて三國史記の史的價値は高められてゐると云ふべきである。

しかも漢書は史記と共に早く將來せられて、大學に於て講ぜられるに至つたものであるから、日本書紀編纂の時にも、必ず編纂の方針を定めるのに參考されたであらう。しかるに日本書紀は支那の正史の體裁を倣はず、列傳なく、地理志なく、我國獨特の正史の體裁を作するに至つた。其所に編修者の識見も見られるのである。けれども、列傳は日本文に一部分織込まれてゐるから兎も角として、地理志の除かれたことは、後世のわれ／＼から見て

甚だ惜まれるのである。この點古事記に於ても亦同様である。

けれども幸にわれ／＼には和銅の風土記若干が遺されてゐる。この風土記の撰上は、必ずしも記紀の闕漏を補ふ目的に成つたものではないと思ふが、その撰上が、記紀の夫れと時代を同じくしてゐる點に於て、地理志として、又地方志として、記紀の不足を補ふものの中、尤なるものはこの古風土記である。栗田寛博士の古風土記逸文考證の緒言にも「先人嘗て謂らく、我が上代の歴史を研鑽するに、其文簡朴にして能く古意を失はず。紀記二典の闕を補ふに足るもの、かの古風土記より善きはなし」とある。かくて古風土記の研究先人は早く着手し、今日も尙上代史家の要望するところである。

ここに紹介する出雲國風土記考證も實にかくのごとき要請によつて出現したものである。もとより、出雲風土記を研究し、及びそれに觸れたものには、岸崎時照の出雲國風土記諺解鈔、内山眞龍の出雲國風土記解、横山永福の出雲國風土記考、荷田春滿の出雲風土記考、富永芳久の出雲風土記假字書（之は梅之舎主人千家俊信の校訂本の訓を旨とし、「草假字に寫し、傍に本書の文字、また正字をも附け」たものである）。木村和男の出雲風土記集解、栗田寛の標注古風土記、纂訂古風土記逸文、古風土記逸文考證、及び懷橋談等の著書がある。而して、本書は土地の實際に即いて上掲該書の大部分の上に、研究を進めた點に特色を持つものである。本書に於て著者後藤氏の努力は二つの方面に集められてゐる。一つは出雲國風土記の定本を作るといふ意氣の下に、異本の校合に向つて努められたこと、是れである。二には、出雲風土記の地

理を實地踏査によつて現在の夫れに比定することに向つて努められたこと、是れである。就中、その後者における著者の努力は異常なもので、それだけこの方面における本書の價値は高いのである。出版書肆が「殊に出雲の地志の研究に到つては、將來ともに先生以外の誰れをも必要としないであらう」と云つてゐるのは蓋し至言であらう。そして神社關係の研究はかの特選神名帳と相似た價値を持つと思ふ。たゞ慾を云へば、著者がより多く地理の土の考證の經過を示されたならば、讀者の本書によつて獲るところは更に大なるものがあらうと思ふ。

本書、始めにはしがきを置き、本風土記研究に必要な概説を試み、次で本文に入る。本文中地圖十一葉を収めてゐる。この地圖は著者が研究の結果を圖示したもので、著者の本風土記研究の目的であつたと同時に、その成果である。そのわれ／＼に與へる利益は少くない。卷末に索引を附したのは書肆の親切であらうか至便である。

紹介者は、出雲風土記研究者は勿論、他の古風土記の研究者のみならず、上代史及び神祇史研究者が本書一本を座右に備へんことを奨め、且つ本書のごとき勞苦多き研究に努められた後藤氏と困難なる出版に成功せられた大岡山書店に敬意を表して、茲に紹介の筆を擱く。(和田軍一)

出雲國風土記考證

(後藤藏四郎著)
大岡山書店發行

遺物遺跡よりの古代研究は、近來大に盛になり、その業績もま

た見る可きものが甚だ多い。然し、古代研究にとつて、最も必要なものの一は、古代文獻の研究である。此の兩方面よりの研究が出来て、初めて古代の研究が完成されるのである。近來、考古學的研究の勃興と共に、古代文獻の研究を輕視する傾向さへも生じたやうに思はるゝが、此の時にあたつて、日本古代の貴重なる一文獻、出雲國風土記の考證を得たのは、まことに欣快の至りである。

古風土記の今残つてゐるものは、出雲國風土記、常陸國風土記、播磨國風土記であつて、やゝ疑はしいと云はれてゐるところの豊後國風土記、肥前國風土記を加へると五つである。が、完全なもののは、出雲國風土記だけであつて、其の記載も、他の四ヶ國のものよりもずつと精密であるからして、出雲國風土記の研究は、最も重要にして、必要でなければならぬ。然も、著者は、出雲國に永年住居する熱心な研究家であつて、一人にして、よく地理、歴史、數學、植物等の専門的知識に通ぜられてゐると聞く。出雲國風土記の考證は、實に、氏にして初めて爲し得るものであらう。

著者は、嘗て、古代の出雲國の地圖を作らうと思ひ立ち、出雲國風土記解や、出雲國稽古知今等の、古代出雲地圖の粗略なのを知り、自ら出雲國風土記の研究中、出雲國風土記解にも、出雲國風土記考にも、隨所に誤謬あることに氣付き、島根縣神職會要報附録として、出雲國風土記考證を掲載した。其後、島根縣皇典攻究所が企てた出雲國風土記本文の校訂事業に加はり、諸種の古寫本を見る機會を得て、今まで唯一の所據として居た訂正風土記は風土記解に盲從する所多く、従つて其の誤謬をそのまゝ踏襲して